母性的養育の継代性に関する研究

伊　藤　美由紀

Ⅰ．問題と目的

Bowlby, J.（1951）の「ホスピタリズムの問題」，および「母性剥奪論」の研究によって，乳幼児期の母子関係の重要性が強調され，これまでに母性の重要性については数多くの研究がなされてきた。しかしここでいう母性の重要性は，子どもの発達にとっての研究が主で，母親側から手懸けられたものは少ないのが現状である。その理由として考えられる第一点は，母子関係における母親側の感情をあつかうことの難しさにあると思われる。母親の子どもへの愛着は，表出される行動と必ずしも直接的に結びつくものとは言いがたいし，可愛いという感情が，つねにわが子への接近行動となって表現されるほどに単純なものではない。このように母親のもつ複雑な感情を実証的に把握することの困難さが，母子関係における母親の研究を遅らせてきた要因の一つと考えられる。また第二点としては，母親の子どもに対する行動は母性本能に支えられていると考えられていたためであろう。本能であれば，折り入って研究する必要性もなかったのかもしれないし，人文・社会科学領域よりも医学や看護学の中で母性が多く扱われてきた経緯もうなずけるものである。どの女性も妊娠，出産を経て母になれば，共通に母性を獲得し，発揮できるものと考えられていたことによるものと思われる。そして第三点としては，わが国の文化的特殊性による理由，即ち母性は絶対的なもの，崇高なものという社会的通念が，研究として母性を扱うことを退けたものと考えられる。すなわち，「母」という言葉自体が，わが国ではすでにひとつの価値的なシンボルとして機能しており，「聖の母」という言葉にもみられるように，母性という概念は，いわば「母性信仰」ともいうべきヴェールに包まれていたようである。

しかしいずれの点も，現在の多くの社会問題（幼児虐待，子殺し事件，母親不在の家庭問題等）や心理臨床の現状（生物的に母親になった場合でも精神的には母親になりにくいといった母親不適応状態等のケース）と照らしあわせて考えれば，おのずから母性の研究の必要性が見いだせるものと思われる。そこで本研究では，母性を母親の内面に焦点をあてて検討することにした。

まずは，これまでの「母性」という概念定義の整理をし，母性研究を概観した。母性という言葉は，日常性・一般性が高く，その概念はあたかも自明のごとくに相互理解あるものとして用いられているが，心理学の研究上では現時点ではコンセンサスの得られていない不明確な概念であった。次に，母性形成の研究の流れを，母性本能説を「目覚める理論」，母性が開発される「めばえる理論」，自分の母親から世代間伝達される「受け継ぐ理論」という３つに大別し，「母性」の研究を整理した。

そこで本研究では，これらの研究の流れを鑑み，母性がどのような概念で構成され，また，その形成の様相はどのようであるのか，すなわち，「母性」の本質についての検討と形成・発達の様相の問題を検討することを主たる目的とした。また，形成・発達の様相に関しては，第３の流れである養育行動の継代性を主眼にし，特に母親の養育行動における感情の伝達に焦点を当てて検討した。

母性に関してはその概念の多様性を踏まえ，現在の母子関係の側面を「母親性」，養護的役割の側面を「養護性」として２面にわけて考えた。そして母性性を「わが子を母親として慈しみ，育むための資質」とし，養護性を「わが子に限定せず，広く相手の健全な発達を促進するための資質」と定義した。

Ⅱ．方　法

調査は質問紙法を用い，調査にあたって調査票を以下のように作成した。調査項目は，広く一般に子どもに対して養護的であるかを問う21項目と，自分の両親の養育行動の受けとめ方を問う31項目と，現在の母子関係の受容を問う28項目と，ソーシャル・サポートを問う９項目によって構成した。本研究では母性の形成要因を自分の母親のみならず，父親との関係やソーシャル・サポートの状況をも加味して調査を行なった。その他，調査対象の基礎項目として母親自身と夫の年齢・学歴・就業形態，子どもの人数・年齢，老人との同居の有無等を尋ねた。調査対象は，愛知県内のＴ幼稚園の在園児の母親全員で，分析の対象となった人数は237名（回収率81.2％）であった。

Ⅲ．結果と考察

調査項目の合計89項目を合わせて因子分析（主軸法により因子を抽出した後，Varimax 回転を行なった）を行なった結果，６因子が抽出された。この結果と因子の

内容を検討した上で，第Ⅰ因子を「母親性の継代」，第Ⅱ因子を「子どもへの興味とケアーの自信（狭義の養護性）」，第Ⅲ因子を「母親性の受容」，第Ⅳ因子を「自分の父子関係の受容」，第Ⅴ因子を「広義の養護性」，第Ⅵ因子を「ソーシャル・サポート」と命名し分析を行なった。結果は次のようにまとめられる。

まず，「母親性の継代」因子について，この得点の群差はほかのいずれの因子得点の群差にも有意な差がみられる傾向が強いということである。とりわけ，「母親性の受容」因子得点の群差との間の有意な差は現在の母子関係の受容と継代性との関係が深いことを意味していると考えられ，母性の形成には母性的養育の継代性の側面を考えることができると言えよう。つづいて「母親性の継代」の得点の群差と「自分の父子関係の受容」の得点の群差の多重比較の結果については，「母親性の受容」因子のみに有意な得点差がみられた。これも母性の形成の過程における継代性の重要性を示唆するものと思われた。さらに，現在の母親の「子ども一般に対する養護性」においては，「ソーシャルサポート」が関連していることがみられた。これらのことは多くの意味を含んでいると思われた。すなわち，母性的養育の継代性の問題は母子関係に止まらず，ほかの人間関係においても般化されるものと考えられる。加えて，ほかの人間関係と比べて母子関係が持つ特殊性を示唆しているとも考えられる。いずれの点も母性的養育の継代性の重要性を裏付けるものと考えられた。

また，母親性と養護性を合成した広く子どもへの感情における母性においては，自分の父親の養育の認知も関係していることが見い出された。結論として，幼児期の子どもをもつ母親は，自分の受けた母親の養育に対する評価が好意的であるほど，現在のわが子や子ども一般に対する母性的養育が良好であることが考えられた。

Ⅳ．今後の展望

本研究は母性の形成の問題を母親自身の養育行動の受け止め方と現在の母子関係との関連に於いて，また，母性の質の問題を母親性と養護性との関連に於いて調査し，検討を試みた。仮説を裏付ける幾つかの有意な結果も得られたが，質問紙の作成について，やや曖昧な質問項目が多かったことなどの不備な点も多く，幾つかの問題点を残すことになった。加えて，本研究は比較的少数の限定された対象者で行なわれたため，今回見出された結果がどの程度の一般性をもつのかについてはさらに検討する必要があると思われる。

今後の課題としては，得られた結果をさらに生かし，質問紙調査では得られなかった点を半構造面接などで補い，「母性」の本質の再検討を試みたい。また，女児の追跡研究などによって，過去の母性的養育から未来の母性的養育へと論点を広げたい。

さらにここから得られた示唆を臨床活動に応用しつつ拡充したいと思っている。

文　献

Bowlby, J. 1969 Attachment and loss Vol.1 Attachment Basic Books 黒田実郎ほか（訳）1976 母子関係の理論1 岩崎学術出版社

大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店

大日向雅美・古澤頼雄・小嶋秀夫 1991 母性の心理・社会学 医学書院